

研究主題「新学習指導要領に対応した、主体的な学びにつながる指導の工夫 －児童が自分の気持ちや考えを伝えたいという思いをもって

粘り強く取り組む授業－」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課

墨田区立第二寺島小学校 主任教諭 渡部 栄美

第1 研究のねらい

社会・経済・政治をはじめ、あらゆる分野、場面でグローバル化が進み、世界は加速度的に変化を続けている。この変化の激しい時代に対応するには、主体的に生きる人材が必要であり、今日的な教育課題として、グローバル社会を自ら切り拓き、世界を舞台に活躍できるグローバル人材の育成が求められている。

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の第1章総則には、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」ことが示されている。児童が、外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関わり、学んだことを生かそうとする「主体的な学び」を実現するためには、自分で調べたり考えたりする時間の確保が重要である。そのために教科等横断的な視点を取り入れながら、伝える内容を重視した単元構成や指導の工夫が必要であると考え、本研究主題を設定した。

第2 研究仮説

児童に単元を学習する意義と価値を考えさせた上で、教科等横断的な視点を取り入れた指導を行えば、児童は自分の気持ちや考えを伝えたいという思いをもち、単元のねらいの達成に向けて粘り強く主体的に取り組むであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

○「主体的・対話的で深い学び」の取組における先行研究の分析

(1) 必然性のある学習活動の大切さ

特に「主体的な学び」に焦点を当てた場合、必然性のある学習活動が大切であることから、教科等横断的な視点を取り入れた学習活動を計画した。

(2) 様々な活動を組み合わせた学習指導事例

新学習指導要領対応小学校外国語教材「We Can!」と同教材指導編に示されている活動を「主体的な学び」につながるように組み合わせて学習指導案を作成した。

2 調査研究

平成30年7月、所属校の第5・6学年の児童（170人）と都内公立小学校25校の教員（314人）を対象に外国語活動、外国語科の意識調査を行った。そして10月には、所属校の第5・6学年の児童と教員を対象に検証授業後の変容を把握するため、再度意識調査を行った。次の(1)から(3)の項目を4件法で問い、「あてはまる」、「ややあてはまる」を肯定的回答とした。

(1) 児童の「主体的な学び」についての意識調査

7月の調査では、「分からない英語の表現を友達と教え合いながら解決しようとしている」についての肯定的回答は、児童71.5%、教員64.7%であった。一方、「分からない英語の表現をALT等の英語を話せる人に直接質問して解決する」では児童34.5%、教員43.7%であり、「他

の教科で学習したことを確認したり、図鑑、インターネットや辞書等を使って調べたりする」は児童 30.3%、教員 17.9%であった。このことから、児童が自ら課題を解決する経験が少ないことが分かった。

(2) 児童の意識調査

「外国語活動の授業が好きである」についての肯定的回答は 78.2%であり、「英語の勉強は大切だと思う」は 93.9%、「英語を使えるようになりたい」は 89.1%であった。英語は大切で使えるようになりたいという児童の意欲を生かし、主体的な学びにつなげる指導の工夫が必要であることが分かった。

(3) 教員の意識調査

「児童は、外国語活動の授業が好きだと思う」についての肯定的回答は 89.2%であった。一方、「外国語活動の授業に自信がある」では 20.0%であり、「他教科と同じように工夫した授業づくりができる」は 24.8%であった。教員が外国語活動の授業づくりに自信をもてる手だてを開発する必要があることが分かった。

3 開発研究

(1) 主体的な学びにつながる単元構成（図 1）

ア 「Ⅰ 学びを確認する時間」

単元を通じて「主体的な学び」を続けることができるよう、単元の導入として第 1 時に必ず Skit（寸劇）（以下、Skit と表記）を行い、授業者と ALT

で英語の表現が思い浮かばなくて困る場面を演じる。Skit を通じて単元を学ぶ意義と価値について児童が考えられるように進める。

イ 「Ⅱ 語彙力を高める時間」

授業者は、児童の知りたいと思う英語の表現をまとめてパネルに掲示したり、児童が振り返りカードに書いた英語の表現を正しい表現にしたりする。

ウ 「Ⅲ 思いと表現をつなげる時間」

単元の目標を達成するために学習活動に教科等横断的な視点を取り入れ、児童が各教科等の既習事項を活用して調べたり、分からない英語の表現を直接 ALT 等に質問したりする。

エ 「Ⅳ 振り返り」

毎時間、児童は振り返りカードにねらいの達成の確認と自分が学んだ内容について記入し、授業者がコメントを入れることで次の学習への意欲につなげる。

(2) 指導の工夫

- ・ 授業の内容と活動を示したカードを黒板に掲示し、授業の流れを可視化する。
- ・ 児童用ワークシート及び振り返りカードを毎時間回収し、児童が単元の流れを把握していることを確認する。

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

平成 30 年 9 月から 10 月にかけて、都内公立小学校にて、第 5 学年 80 人を対象に「We Can! 1 Unit 5 『できること She can run fast. He can jump high.』」（全 8 時間）、第 6 学年 90 人を

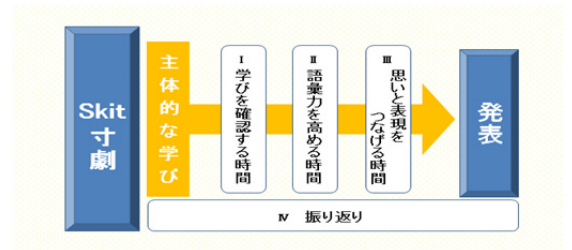


図 1 単元構成

対象に「We Can! 2 Unit 2『日本へようこそ Welcome to Japan.』」（全8時間）の検証授業を実施した。また、各学年一クラスは同内容で担任が授業を行った。「主体的な学び」につながる学習指導方法と、児童及び教員が使用する資料の有効性を検証した。

(2) 仮説の検証

ア 主体的な学びにつながる単元構成の有効性

各授業の最後に行う児童の振り返りカードの分析及び授業時の児童観察、所属校の教員と第5・6学年の児童を対象にした意識調査から、指導の有効性を検証した。

(7) 「Ⅰ 学びを確認する時間」

振り返りカードの結果から、「先生たちの演技を見て、これから何を学ぶのか分かりましたか」についての肯定的回答が96.9%であった。この結果から、単元導入時に Skit を取り入れたことにより、児童が学習する意義と価値を理解した上で見通しをもって学習を始めることができたと考えられる。

(4) 「Ⅱ 語彙力を高める時間」

児童が知りたい言葉をカードで掲示し、各児童が振り返りカードに書いた言葉を正しい英語で示した。第5学年で26語、第6学年では29語の語彙を増やすことができた。

(4) 「Ⅲ 思いと表現をつなげる時間」

児童が「伝えたい内容について、他の教科で学習したことを生かしたり、図鑑、インターネットや辞書等を使って調べたりする」についての肯定的回答が、30.3%から80.0%に上昇した。また、児童が「分からない英語の表現を、ALT等の英語を話せる人に直接質問して解決する」についての肯定的回答が、34.5%から78.4%に上昇した。単元の中で、児童が伝えたい内容の英語の表現が分からない際に、主体的に学べる場を設けたことで、児童が「主体的な学び」を体験し、達成感と満足感を味わうことができたと考えられる(表1)。

表1 「主体的な学び」の意識調査

項目	教員	児童
分からない英語の表現を友達と教え合いながら解決しようとしている。	63.6% ↗ 76.2%	71.5% ↗ 82.0%
分からない英語の表現を、ALT等の英語を話せる人に直接質問して解決する。	45.5% ↗ 61.9%	34.5% ↗ 78.4%
伝えたい内容について、他の教科で学習したことを生かしたり、図鑑、インターネットや辞書等を使って調べたりする。	13.6% ↗ 71.5%	30.3% ↗ 80.8%

(1) 「Ⅳ 振り返り」

児童が振り返りカードに書きとめた英語の表現を確認し、できたことを具体的に褒めることにより、児童は自分の学びを確認した。「前回より聞き取りが多かったけど、聞き取れるようになったので楽しかったです」や「動画のようにうまくはできないけど、日本食をお勧めしたいです」などの感想から、意欲を高めることができたと考えられる。

イ 指導の工夫

- 児童用ワークシートを通じて、児童は授業の最初と最後に学びの意義と価値を確認することができた。教員にとっては児童の気持ちや考えを把握する上で有効だった。
- 授業の進行を示すカードを掲示することにより、児童にとって学習内容と手順が明確になり、安心感につながったことが振り返りカードの記述内容から分かった。教員にとって

も、カードを表示することで、学習過程に沿った ALT 等との役割分担が明確になり、効率的かつ効果的に授業を進めることができた。

(3) 児童の意識調査

第6学年では、「外国語活動の授業が好きである」の数値が上昇したが、第5学年では数値が低下した。その理由として外国語活動の経験が浅い児童にとっては、発表で行うクイズのルールが難しかったことと、主体的に取り組む自分の意見をもつことに慣れていないことが考えられる。「難しいけど楽しい」、「クイズを作るのは大変だったけど、質問出来て良かった」という感想もあった。児童の「6年生になって自分で単語を見付け出したり、発音を教わったりして、得意ではないけれど、英語が大好きになりました」、「自分が話す目的について自信をもってやれたことが良かった」などの感想から、教員の明確な指示の下、児童が主体的に考え取り組む学習を継続することで、第6学年になった際には活動を通じて達成感を味わい、主体的に取り組むことを楽しめるようになると考えられる(表2)。

また振り返りカードの記載では、98.5%の児童が「発表が成功するために粘り強く取り組んだ」と回答していることから、児童は気持ちや考えを伝えるために粘り強く取り組むことができたと考えられる(図2)。

表2 児童の意識調査

項目	第5学年	第6学年
外国語活動の授業が好きである。	74.1% ↘ 62.0%	83.0% ↗ 89.8%
英語の勉強は大切だと思う。	90.9% ↗ 92.4%	96.6% → 96.6%
自分の気持ちや考えを伝える。	70.2% ↗ 75.0%	78.5% ↗ 93.2%

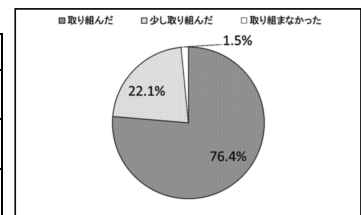


図2 粘り強い取組
 (児童の振り返りカードから)

(4) 教員の意識調査

所属校の教員を対象に検証授業後に再度意識調査を実施した。「他教科と同じように、外国語科も自分で工夫した授業づくりができる」という教員の割合が36.3%から81.0%へと44.7ポイント上昇した。本研究を通して単元全体を通じた具体的な指導方法を知り、児童の意欲的で主体的な姿を確認したことが、授業づくりをする上での参考になったと考えられる。

第4 研究の成果

- 児童は Skit で学習する意義と価値を確認できたことで、家庭においても自分の興味がある内容について主体的に調べたり、家族や友達に質問したりするなどして取り組むことができた。
- 「思いと表現をつなげる時間」では、児童が他の教科で学習した内容等も含めて自分で調べたい内容の英語の表現を ALT 等に質問して、適切な英語の表現を使うことができた。
- 単元を通して指導方法を工夫すれば、児童は自分の思いをもち、発表に向けて粘り強く主体的に取り組むことが分かった。
- 学級担任も本研究の単元指導計画を用いて、検証授業と同様の授業を行うことができ、他の教員も外国語活動、外国語科での授業づくりが自分でできるという自信につながった。

第5 今後の課題

- ・全ての児童が主体的に授業に取り組むことができるよう、児童の外国語活動の学習経験等の実態に応じて、教室英語や Skit の難易度を調整する等の指導の工夫を開発していくこと。